新刊紹介

B. Kavanagh, G. Branny & A. Adamowicz-Pospiech, eds.

Conrad without Borders: Transcultural and Transtextual Perspectives

Bloomsbury, 2023. 271pp.

高橋　諒

本書は、地理的な境界を超えた作家としてのジョゼフ・コンラッドと言う観点をテーマにした論文集である。Introduction によれば、本書の目的は、コンラッドと言う作家の存在の多岐にわたる範囲を強調し、アングロ・アメリカンとポーランドのコンラッド研究にあるギャップを埋め、そのような橋渡しをより広いトランスカルチュラルな考察へと位置付けることにあるという（1）。また、ポーランドの歴史や文化、文学的コンテクストと言った視点を提示することも目的の一つとされており、本書を読むことで抑圧されたポーランド人コンラッドの示唆的なレトリックをも知ることができるだろう。本書で言及されているのは文学作品だけに留まらず、手紙や自伝、さらには当時の時代背景をもとに考察されたものも収録されているため、コンラッドと言う作家を立体的かつ包括的に一望できる一冊であると言えよう。

本書は Part が 3 つに分かれており、各 Part は、Part 1 が 1 章から 5 章、Part 2 は 6 章から 11 章、Part 3 は 12 章から 16 章というように章立てされている。ここで各章について簡潔に紹介する。

1 章、Jakob Lothe による“Conrad’s Triple Perspective: History, Memory, Fiction”では Gérard Genette の語りの声と視点についての議論を引用しながら、コンラッド文学における語りの複雑性や多重声がポーランド人としてのアイデンティティ、航海士、そして作家という文化を越境した経験の混合物であることが示されている。

2 章、Karol Samsel の“Conrad as a Reader of Adam Mickiewicz’s *Grażyna*”は Mickiewicz の詩がコンラッド文学(*Lord Jim* や *Chance* など)に表れている数々のアイデアや語りの問題に影響を与えていることを考察している。

3 章の“An Epistemological and Denegative Reinterpretation in the Faulknerian Context of Conrad’s Malay Tale ‘The Planter of Malata’”で、Grażyna Maria

Teresa Branny はコンラッドの "The Planter of Malata"における語りの形式とウィリアム・フォークナーの *Absalom, Absalom!*や *The Sound and the Fury* におけるそれとにテクスト間の相互関連性やトランスカルチュラルなつながりが見られることを明確に述べている。

Pei-Wen Clio Kao による 4 章、"The Power 'not to': Agambenian Thought in Conrad's *Victory* and Faulkner's *Intruder in the Dust*" では Agamben の「inoperativity と im/potentiality」を念頭に置きながら両者を分析している。この章においてもコンラッドがフォークナーと比較されている点は興味深い。

Part 1 の最終章となる 5 章、Ewa Kujawska-Lis による"'*Ich Bin Nicht Einer Von Euch*': Language as a Tool to Construct the Identities of Conrad's German Speaking Characters"では、*Lord Jim* や *Victory* などにおいて多様なドイツに起源を持つ登場人物たちの話す言語を、コンラッドがどのように取り入れているかについて考察されている。

Part 2 の始まりとなる 6 章は、"Time, Place, Scale, and Decorum: Conrad and the Polish Romantic Drama"という題目である。ここで Laurence Davies はポーランド作家たちによるロマンスが、コンラッドのポーランド気質ともいうべきスタイルに引き継がれているということを議論しており、コンラッドのルーツを知る重要なものとなるだろう。

7 章、Anne Luyat による"The 'Curve' of Time: Modes of Imaginative Inquiry in *Under Western Eyes*"は、ロシアの圧政を経験したコンラッドの *Under Western Eyes* に表象される語りの手法であったり、語り直し(retelling)と言ったテーマで、特に登場人物の Peter Ivanovitch について焦点が当てられている。

Agnieszka Adamowicz-Pośpiech による 8 章、"Conrad's Afterlife: Adaptations of Conrad's Biography in Contemporary Polish Culture"は、コンラッドの人生というものがポーランド文化に組み込まれていった事実の過程を、様々なアダプテーション(例えば漫画や劇など)を提示しながら議論している。

9 章、榎田一路による"Communication with Marconi's Electric Waves: Conrad and Wireless Telegraphy"は 20 世紀初頭の発明品である無線電信に対するコンラッドの反応を手記などから綿密に精査している。この点については後で詳しく言及したい。

Gloria Kwok Kan Lee の"Representing Conrad in Modern China"は、コンラッド

文学が中国語へと翻訳=解釈されたことにトランスカルチュラルな主題を見出している。この 10 章で、中国の翻訳家たちの仲介を通して、コンラッドの物語を読む中国の読者たちが西洋中心主義的な考えではなく、普遍的な人類についての道理を取り込むことができたということを考察している。

Narugopal Mukherjee による 11 章、"The Man Who Foresaw It All: Joseph Conrad and India"では、コンラッドは単に英国作家というのではなく、異文化について説く哲学者であるとし、グローバル化が進む現代においても「わたしたちの中の一人」であると言う。そしてコンラッドが現代にも通ずる作家であるとした後、インドの文化との関連で彼の重要性を指摘している。

Part 3 最初の論文となる 12 章は"Transcultural Negotiations: *A Personal Record*, 'Prince Roman', and The Warrior's Soul"と題された Robert Hampson によるものである。*A Personal Record* だけでなく、コンラッドの手記にも着目し、コンラッドの"make Polish life enter into English literature"(198)と言う試みを考察している。

13 章、Joanna Skolik による"Reading *Under Western Eyes* from the Polish Perspective"は、主にコンラッドのロシアに対する態度を理解するためにポーランドの歴史と、それがコンラッドに与えた影響について精査している。彼のトラウマの中心にあるものがロシア帝国の抑圧で、*Under Western Eyes* の主人公である Razumov の細かな発言にまでそれが表現されていると述べている。

"The Dangerous Subject Is the Displaced Subject: Conrad's Short Fictions"と言うタイトルの 14 章で、George Z. Gasyna は Gayatri Spivak の考えを用いながら、いわば西洋人ではない周辺化された登場人物たちがいかに話そうとしないかについて論考している。

15 章の"'I Must Live Till I Die—Mustn't I': The Hybrid Art of Joseph Conrad and Salman Rushdie"と題された G. W. Stephen Brodsky による考察では、*The Nigger of the "Narcissus"*の登場人物 Wait のセリフが Salman Rushdie に影響を与えていると分析しながら、東洋と西洋の文化を超え、時や場所を変えて反響していると述べている。

本書の最終章となる 16 章、"Metropolitan Terror in *The Secret Agent*: Truth and Fiction in a Surreal Drama"で、Gerard Kilroy はコンラッド文学におけるアイロニーや超現実主義的な観点を考察する際に、T. S. Eliot の *The Waste Land* との

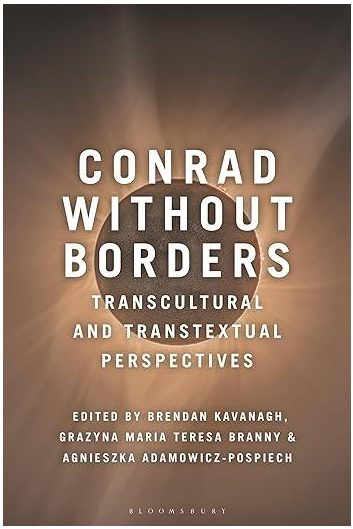
比較をしている。ディケンズやトルストイと言った、しばしばコンラッドとの比較対象にされる作家よりも T. S. Eliot の方が言語的に近似性が高いと言う論考は非常に興味深い。

以上が全ての章についての簡潔な紹介である。祖国ポーランドのアイデンティティを決して喪失せず、かつ、その地から離れていたとは言え、彼は抑圧されていた祖国とともにあったのだ。そしてポーランド文学や詩から受け継がれた血を英国文学に取り入れ、その血が他国へと輸血されるかのように伝播していく様子は、まさに without border と言える。また、航海士と言う経験をもとに西洋以外の国々にも文学的想像力を働かせ、普遍的な人間心理を描写しようと試みたと言う点においても、彼が文化を越境した作家だと再認識させられる一冊である。

では次に、興味深かった点について言及したい。ここで注目したいのは 9 章の榎田の論考である。先に述べた通り、榎田は無線電信の誕生とそれに対するコンラッドの反応を緻密に考察している。彼はまず電信ケーブル誕生の歴史を冒頭で述べ、英国が海を越えてネットワークを拡大していく史実を説明している。そしてその事態は情報交換の高速化を意味すると言う点で、コンラッドは“similar to today’s contemporary society living in the age of the internet” (145)を生きていたと言うことになる。こうした時代背景を踏まえ、榎田は“An Outpost of Progress”はコンラッドのコンゴ自由州での実体験をもとに描かれた作品であるとし、船乗りだったコンラッドは電信機器が不可欠であったと論じる。しかしながら、“However, it had also produced discrepancies between places where information did and did not arrive” (147)と言う彼の言葉通り、物語の主人公である Kayerts と Carlier は最も近い電信局から 300 マイルも離れており、“‘uninformed’ places” (147)の一つとなっている場がある。そしてそれが皮肉にも主人公の孤立化を効果的に描写していると言う指摘は非常に興味深い。

続いて印象に残った箇所は、11 章の“The Man Who Foresaw It All: Joseph Conrad and India”である。Narugopal Mukherjee はここで、Maya Josanoff の *The Dawn Watch* をしばしば引用し、「わたしたちの中の一人、つまりグローバル世界の市民」(184)たるコンラッドを活写する。“Heart of Darkness”についての考察では、単にアフリカを支配する西洋人としての heart of darkness を描いたのではなく、一人の人間の heart of darkness を描き出したという説明が次の引用である。“Conrad realized that it was not just one particular colonial rule or one imperialist force

that presented a threat to the African community, as evil is always very much inside the heart of humans; it is a person's 'heart of darkness.'" (178)。ここから Narugopal Mukherjee は、インド社会におけるカースト制度や人種問題について見解を広げており、コンラッド文学は、支配する側としての西洋人と支配される側としてのアフリカと言う構造の枠を超え、再解釈することができると言う識見が示されている。また、「わたしたちの中の一人」という点において、*Nostromo* では "Nostromo"は洗練されていない英国人が発音すると"nostro uomo"というふうになり、つまりそれは"our man"と言うことになる(181)と言う箇所への接続も実に鮮やかなものである。

総じて、*Conrad Without Borders* という論文集は、文化を越境し、テクストを越境している作家ジョゼフ・コンラッドを浮き彫りにしている。西洋文化圏だけでなく、アジアやアフリカといった地域においても、彼の描き出す人物像や物語設定は通ずるものがある。本書は冒頭で触れたこの論文集の目的をはるかに凌駕し、時代をも超え、我々の生きる今現在にまで通底するような彼の声が生き生きと聞こえてくるような労作である。

（たかはし　りょう　　神奈川大学他 非常勤講師）